TADOKU JUNIOR はじめての名作童話 ★★★☆☆ ふつう 618語

The Straw, the Coal, and the Bean

わらと炭とそら豆

Katharine Pyle（1918年の本） 原文そのまま 朗読：Bekaroo

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？ そら豆と炭とわらが、いっしょに旅に出ました。小川をわたるため、わらが橋になりますが……。そら豆に黒い線があるわけがわかるお話です。

A bean and a hot coal met each other on the highroad, and as they were both rolling along in the same direction they soon struck up a friendship.

Presently they were joined by a straw, and the three began talking together. They were all going out in the world to seek their fortunes.

“It is just a bit of luck that I can travel about in this way,” said the bean. “If I had not been a stout active fellow I would have been boiled into soup by now. The mistress was about to throw me into the pot with a lot of other beans, but I managed to slip through her fingers and rolled out through the doorway and down the steps without her even noticing I was gone.”

“That was a clever trick,” said the hot coal. “I, too, am a lively chap. I and my brothers were set to heat a kettle, but I jumped out of the fire, and I was so hot the cook did not dare to touch me. She pushed me out of doors with her foot, and now I am free to go about the world as I choose, and seek my fortune.”

The straw sighed. “I was never as active as that,” she said. “Always wherever the wind blew me I went. The farmer had picked up a whole armful of straws to make a bed for the cow; but the wind caught me up and carried me off—and here I am.”

While they were talking in this way the comrades came to a brook, and this stopped their journey, for they did not know how to get across. The straw could easily have sailed over on the first puff of wind, but that way would not do for the other two.

“Listen!” said the straw. “I am long enough to reach from one side of the stream to the other. I will lay myself across it like a bridge, and then you can both walk on over me without getting wet.”

To this plan the other two were glad to agree, so the straw laid herself across the stream.

“You go first,” said the bean, for he was a cautious fellow, and wanted to see whether the bridge was safe before he tried it.

The coal, however, was quick and fiery. He ran out on the straw, but half-way over he grew dizzy and had to stop.

“Quick! quick!” cried the straw. “I am burning”; for the coal was still very hot.

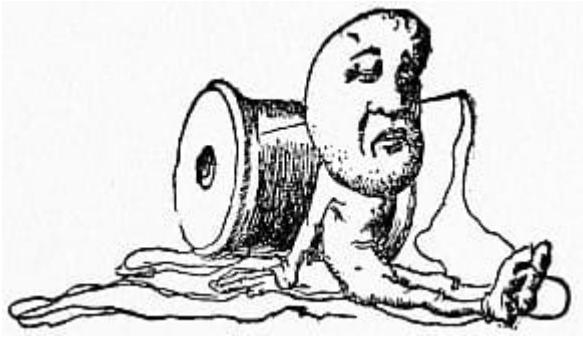
“Wait,” said the coal, balancing himself. “Just a minute!”

But the straw could not wait even for a minute. The coal had burned through it, and down they both went into the water, the coal hissing as it fell.

That seemed so comical to the bean that it began to laugh. It laughed and laughed; it laughed so hard that at last it split its skin, and that would have been the end of it if a tailor had not chanced to come by just then.

“Help! help!” cried the bean.

The tailor looked all about him, and then he saw the bean lying on the ground. He picked it up, and it did not take him long to see what was the matter with it. “This slit can be easily mended,” said he, and he whipped out his needle and thread and sewed up the bean in a trice. Unluckily he had only black thread, and the stitches made a line of black down the side of the bean. And ever since then, if you look, you will see that every bean of that kind has a black line down one side of it.



そら豆と、まっ赤にもえる炭が大通りで出会いました。どちらも同じほうへころがっていたので、すぐに友だちになりました。

まもなく、わらが1本仲間にくわわって、3人はいっしょにおしゃべりをはじめました。3人とも、運をためしに広い世の中へ出かけるところでした。

「こうして旅ができるなんて、ちょっと運がよかったんだ」とそら豆は言いました。「ぼくががんじょうで、すばしこいやつじゃなかったら、今ごろはにられてスープになっていたよ。おかみさんが、ほかのたくさんの豆といっしょに、ぼくをなべにほうりこもうとしたんだ。でも、ぼくは指のあいだからするりとぬけて、戸口からころがり出て階だんをおりてきたのさ。おかみさんはぼくがいなくなったのに気づきもしなかったよ。」

「そいつはうまいことやったね」と、もえる炭は言いました。「ぼくも元気のいいやつなんだ。ぼくは兄弟たちといっしょに、やかんをあたためる役だったんだけど、火の中からとび出したのさ。ぼくがあんまりあついので、コックさんはさわるのがこわかったんだ。コックさんはぼくを足で外へおし出したよ。だから今は自由に世の中を歩きまわって、運をためせるってわけさ。」

わらはため息をつきました。「わたしは、そんなに元気じゃなかったわ」とわらは言いました。「いつも風にふかれるまま、どこへでも行っていたの。お百しょうさんが、牛のねどこを作るために、わらをどっさりかかえあげたんだけど、風がわたしをさらって運んでいったの。それでここにいるのよ。」

こんなふうに話しているうちに、仲間たちは小川に来ました。どうやってわたればいいかわからないので、旅はそこで止まってしまいました。わらなら、ひと風ふけば、かんたんにとんでわたれたでしょう。でも、ほかの2人はそうはいきません。

「聞いて！」とわらは言いました。「わたしは長いから、川のこちらがわからむこうがわまでとどくわ。わたしが橋のように川の上に横になるから、2人ともその上を歩いてわたれば、ぬれずにすむわよ。」

ほかの2人はよろこんでさんせいしたので、わらは川の上に横になりました。

「きみが先に行きなよ」とそら豆は言いました。そら豆は用心ぶかいので、自分でためす前に、橋がだいじょうぶか見たかったのです。

ところが炭は、せっかちで気が短いやつでした。炭はわらの上に走り出ましたが、まん中まで来たところで目が回って、止まってしまいました。

「早く！　早く！」とわらはさけびました。「もえちゃう！」炭はまだとてもあつかったのです。

「待って」と炭は、バランスをとりながら言いました。「ちょっとだけ！」

でも、わらはちょっとでも待てませんでした。炭がわらをもやしてしまい、2人ともいっしょに水の中へおちていきました。炭はおちながらジューッと音をたてました。

それがあまりにおかしかったので、そら豆はわらいだしました。そら豆はわらって、わらって、わらいころげて、とうとう皮がパチンとはじけてしまいました。ちょうどそのとき、したてやさんが通りかからなかったら、そら豆はそれでおしまいになるところでした。

「助けて！　助けて！」とそら豆はさけびました。

したてやさんはあたりを見まわして、地面にころがっているそら豆を見つけました。したてやさんはそら豆をひろいあげると、どうしたのか、すぐにわかりました。「このさけ目なら、かんたんになおせるよ」と言って、したてやさんははりと糸をさっととり出し、あっというまにそら豆をぬいあわせました。あいにく、したてやさんは黒い糸しか持っていなかったので、ぬい目がそら豆のわきに黒い線になってのこりました。それからというもの、よく見てごらんなさい。そのしゅるいの豆には、どれもわきに黒い線が1本ついているのです。

たんご と クイズ わらと炭とそら豆

bean そら豆・豆	**coal** 炭	**straw** わら
soup スープ	**kettle** やかん	**brook** 小川
bridge 橋	**tailor** したてやさん	

Q1 小川をわたるために、橋になったのはだれ？

① 炭　② わら　③ そら豆

Q2 そら豆の皮がはじけたのは、どうして？

① わらいすぎたから　② 水におちたから　③ 火にあたったから

Q3 そら豆に黒い線があるのはなぜ？

① 炭にこげたから　② 黒いペンでかいたから　③ したてやさんが黒い糸でぬったから

こたえ

Q1 ② わらは長いので、川の上に横になって橋になりました。でも、あつい炭がわたったので、もえてしまいました。

Q2 ① 炭とわらが水におちたのがおかしくて、そら豆はわらいすぎて、とうとう皮がはじけてしまいました。

Q3 ③ したてやさんは黒い糸しか持っていなかったので、ぬい目が黒い線になってのこったのです。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #49001（Katharine Pyle、1918年）。パブリックドメイン。
挿絵：Katharine Pyle（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Bekaroo（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。